# 「暗黙知論」の実践としての指導法（コーチング）と采配
## ―考える闘将「オシム語録」を読み解（ほど）く―

柴　田　庄　一

**はじめに**

今ではいささか旧聞に属することになるが、周知の通り、2006FIFA ワールドカップ・ドイツ大会は、実力伯仲にともなう熾烈な激戦のすえ、辛くもフランスとの PK 戦を制したイタリア代表が有終の美を飾り、日本チームは、ただの１勝も挙げることのできないまま惨敗を喫して閉幕した。このことにより、少なくとも二つの問題点があらためて浮き彫りになったのではないかと思われる。ひとつは、歴史の浅さゆえ已むを得ないことであるとはいうものの、日本チームの水準が、いまだサッカーの発展途上国レベルにしかないという否定しがたい厳然たる事実であり、今ひとつは、それにもかかわらず、ただただ「大本営発表」を流通させることにのみ奔走する、相も変わらぬマス・メディアの示した報道姿勢のお粗末さである。

まず、肝心かなめの戦力についていえば、体格やスピードの違いといった身体能力はひとまず措くとしても、かねてから指摘され続けてきた決定力不足はもとよりのこと、競り合いに弱いディフンスの甘さや、妥協を許さぬマンマークの欠如とならんで、ボールの保持技術やパス回し、さらには、チームとしての組織力とフォーメーションプレイの精度においてさえ、日本固有のカラーにまで晶化した独自のスタイルともいうべきものが見当たらず、こと世界的レベルで戦うには、どうやら原点から組み立て直すしか他に術（すべ）がないという抜本的見直し策が必要不可欠であることが明らかとなった。一方、これを報道する側にしても、日本チームの力量や実態の精査はそっちのけにして、単に口当たりがいいだけの、甘口のサービス情報を垂れ流すというのでは、いつまで経っても何ひとつ大事なことは学べないのではあるまいか。ましてや、真にプロならではの識見を問われるべき解説者やコメンテーターまでが、一介の門外漢や俄作りのサポーターたちよろしく、こぞって「真実」とは程遠いガセネタをばら撒くだけというていたらくは、ほとんどスポーツ・ジャーナリズムの自滅行為というしかないであろう。

じっさい、「辛口の批評」で鳴らしたセルジオ越後は、日本チームの反省点を「山ほど」列挙したあとで、なおも口を極めてこう断罪している。「メディアの責任も重大だ。この４年間、日本が世界で戦うには力不足だと真摯に指摘したメディアはいくつあったか。彼らはいい加減なことばかり話し、書いてきた。海外組を意味もなく持ち上げ、何もしていないうちからジーコを神様と奉り、輝いてもいないのに『黄金の中盤』とはや

したて、ファンタジーのない選手をファンタジスタと称賛した。揚げ句の果ては、『サムライブルー』だ。」「実力がないものを『ある』と嘘をつき、それでビジネスしてきたのが日本のメディアだった。」（『週刊朝日』2006年７月７日号）いやはや、冗談などではもとよりなくて、ずぶの素人ファンとも何ら変わらぬプリミティヴなレベルで、ひたすら一喜一憂してみせるばかりが能ではあるまい。

しかしながら、かくの通り、破廉恥きわまる架空の情報を囃し立て、必要以上に観客大衆を煽り立てて憚らないのは、何も今回が初めての愚挙というわけではない。そもそもＪリーグの発足当初から、BS放送の普及を図るという美名のもと、「公共放送」としては過剰なまでのスポットを打ち続けたのが他でもなく宣伝がらみのNHKであったし、経済や政治ウオッチャーをも含めたマス・メディアと大衆との共犯関係は、すでに「大日本帝国」やらナチスドイツの往時にも見られた日常茶飯事であったことを、今一度、しっかりと思い起しておくことこそ至当であろう[1)]。

そうした折りも折、次期総監督として日本の代表チームを率いることになったイヴィツァ・オシムは、幸いにも、長らく辣腕の知将として知られた名トレーナーであり、取材記者たちに対しても、ただただ闇雲に感想を訊き出そうとするのではなく、せめて眼の前で起こっている出来事は、自分の目を見開いてよく見た上で、しっかりと考えるようにと諭（さと）すことの珍しくはない人物であると伝えられる（―その心は、「思考能力を欠いた、ただの木偶（でく）の坊にだけはなるな」との教訓である―）[2)]。じっさい、その座談や会見は、味読すべき幾多の文章表現（フレーズ）に事欠かないというだけではなく、あたかも「暗黙知論」の応用とも見まがわんばかりの内容を湛（たた）えていて、含蓄が深い。ここでは、「身体技能」の熟達過程を考察するという視点から、ドイツ語メディアによる報道記事を始めとし、「監督語録」（J1千葉のHP）や木村元彦『オシムの言葉』（集英社インターナショナル）

---

１）因みに、辺見庸の最新刊『いまここに在ることの恥』と『自分自身への審問』（いずれも毎日新聞社）の二著は、恥も外聞もかなぐり捨て、歴史に学ぶことがまるでできない「おためごかし内閣」に阿（おもね）るばかりの広報機関に成り下がり、すっかり腐れ果てた大手マスコミの現状を痛罵しつつ、同時に、黙（もだ）しがたい懊悩と痛憤をも迸らせた告発文を収載していて、感銘が深い。ジャーナリストの魂魄を知るに当たり、真っ先に指を屈すべき必読文献の雄たる資格を欠いていない。

２）メディアに対するオシムの批判的な対応が、何も今にわかに始まったわけのものでない次第については、しかるべき因果関係が認められる。そのことにまつわる詳しい経緯（いきさつ）については、オーストリアのクラブチーム「シュトゥルム・グラーツ」の監督（1994－2002）時代のインタビューを収めた『イビチャ・オシムの真実』（エンターブレイン）ならびに木村元彦監修『オシムが語る』（集英社）が興味深い。また、スポーツ番記者による最新刊、原島由美子著『オシムがまだ語っていないこと』（朝日新書）には、オシム本人や身近な関係者たちの発言が数多く収録されていて参考になる。

をもふくむ関連資料を読み解(ほぐ)しては再構成し、代表コーチが標榜する「考えながら走るサッカー」の真髄と思(おぼ)しきものについて、及ばずながらも若干の検討を加えてみたいと思う。

## 1 リスクを冒す人生と「サッカー哲学」―サラエボの戦火を潜って

イヴィツァ・オシムについて語るとき、どうしても忘れてならないのは、彼が、ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボの出身者であるとともに、90年ワールドカップ・イタリア大会において、旧ユーゴスラヴィア最後の代表監督として、ナショナルチームをベスト８にまで導いた名将であるという隠れもない事実であろう。それは、何も栄光に包まれた赫々(かっかく)たるキャリアを称賛したいがためではない。スロベニアとクロアチアの独立宣言に端を発し、共和国同士が激しく角突き合わせた90年代の内戦時代（91－96）においては、コーチ自身、否応なく政治に翻弄されることを余儀なくされたばかりか、包囲戦の最中(さなか)、妻子までもが二年半の長きにわたってサラエボ市中に取り残され、文字通り戦火の下を潜らなければならなかったという歳月を送っている。

サラエボが政府軍による砲弾に曝された92年４月、スウェーデンでのヨーロッパ選手権への出発を間近に控え、他に何ひとつ適当な選択肢がないと思い知るや、オシムは、抗議の意思を表わすべく代表監督を突如として辞任し、ユーゴスラヴィア代表チームも、結局のところ、国連決議によるスポーツ制裁にともない、すべての国際試合から締め出されるという結末となった（―それは同時に、国民国家や民族イデオロギーに蹂躙されるしかない「近代スポーツ」というものの、ひとつの典型例を表わしてもいるのだと言っていい―）。已むを得なかった当時の決断を回顧して、監督自身、のちに、「私は心のどこかでまだ、友愛と共存を信じていたかった。サッカーとサラエボの両方への思いの中で気持ちは揺れていましたが、他にもう手の打ちようがないと思った時に身を引くことを決意しました。戦争の始まる数週間前に、サラエボで代表の最後の親善試合を行いました。あの時は満員のスタジアムでサポーターから近年にないものすごく熱い応援をもらった。今までにない平和なムードに驚くほどでした。今、思えば、それは多民族が平和に共存する国家への最後のラブコールだったのではないかと思います。平和を求めるあの時の人々の柔和な表情を私は忘れることができない」（「オシム監督語録」）と述懐している。

こうした最悪事態の真っ只中にあって、苦渋の決断を迫られたのは、むろんのこと、ただ監督ひとりのみにはとどまらなかった。いかなる理由があったにもせよ、選手たちもまた、厳しい政治状況に促拍され、ひとり欠け、ふたり欠けして、必ずしも思うような戦力が整わないという事情が次第に明らかになっていった。それにもかかわらず、敵前逃亡を潔しとしないのならば、埒もないないものねだりをしてみたところで致し方が

ないのであって、たとえ不十分な条件下においてでさえ、与えられた戦力の嵩上げを図りつつ、何としてでも闘いに赴くしかないのがチーム競技の宿命というものである。こうした過酷なまでの諸条件を掻い潜って研ぎ澄まされてきた「サッカー哲学」であってみれば、オシムのそれが、チームワークの重要性を基礎としつつも、いざというときには、リスクを冒すことをもまた決して辞するものでないとするのも、何ら不可思議なことではないと言えよう。じじつ、オシムの唱導するフットボールは、まさに人生そのものがそうであるのと同じように、予め考案され、定められた監督（コーチ）の戦略やシステムへの忠誠を超えて、むしろ選手ひとりひとりの直観的な判断力と決断を、思いのほか重要視するものに他ならないのである。

## ２「考えて走る」ということ―身体技能の階層性と「暗黙知」

サッカーという競技は、そもそもが、ゴールの奪い合いを基本として構成されたスポーツであり、ありていにいってしまえば、11人の選手たちで得点の多寡を競い合う、この上もなくシンプルな点取りゲーム以外のものではない。してみれば、ディフェンスラインを極端に下げ、自陣でじっと守りを固めているだけでは何ごとも始まらないので、まずは、相手のゴール目掛けてプレッシャーをかけ、果敢に迫（せ）り上がってゆく「作戦展開」こそが求められよう。その際、「動き」を生み出す手策（てだて）として考えられるのは、基本的には二つであって、おそらくは二つだけに限られる。すなわち、ボールを動かすのか、それとも人が動くのか、その選択如何ということになるだろう。しかしながら、たとえボールを動かしはしても、それにつれて、選手もまた動くというのでないならば、その後の展開の可能性は局限されざるをえないし、ましてやゴールキーパーを脅かすに足る上首尾にまでは容易（たやす）く繋がることもありえまい。かくして、真に必要とされるのは、当然のことながら、両者の湊合もしくは統合の努力ということに帰着する。

ところで、オシムの掲げる基本的モットーは、走りに走ること、そして同時に考えよということである[3)]。一回の試合時間は、ロスタイムや延長の場合を度外視すると、前

---

３）この点に関するオシムの見解は、殊の外、明快である。「当然だろう。走れなかったら、どうやってサッカーをやるんだ？ボールを持っていたら相手が取りに来る。取られないためには走る。取られたら走って奪いに行く。そんなのはルール以前の話だ。」（『オシムの言葉』、119ページ）

４）基本的なプログラムとして、たとえば、コート全体を使っての３対３や、ハーフコートにおける１対１、あるいはペナルティエリア内での３対２による攻防といった試合形式の練習がしばしば行われる。また、６ないし７色もの色分けによるビブス（ゼッケン）を使っての対人トレーニングは、実戦で起こりうるあらゆる場面を想定し、フォーメーションにおける選手個々人の役割や攻守切り替えのタイミングなどを感じ取らせるとともに、先の展開を見込んでの的確な状況判断のポイントに素早く気付かせることが主眼となっている。

後半合わせて90分を数えるので、選手にとっての必須要件は、何を措いても、まずは90分間、ひたすら効果的に走り続けられる運動能力が具わっているかどうかにかかっている。そのため、体力強化をも兼ね、とりわけ「走り」を中心とした各種のトレーニング・プログラムが課されることは、何ら驚くにあたらない[4)]。とはいえ、サッカー選手に求められるものは、もとより陸上競技の選手と同じではないので、ただがむしゃらに駆け回ってさえいればそれでよいということにはならない。したがって、檄を飛ばすべく随所で口をついて出るオシムの言葉は、「考えながら走れ」である。では、いったい何を考えよというのであろうか。

チームに託された至上命題が、つまるところ一回でも数多くゴールネットを揺らして勝利を収めることにあるとするなら、選手が考えるべきことがらは、個人技の精度を高めながら、いかにしてチームの勝利に貢献できるかということを措いては他にない。とはいえ、そのことは、選手各人が、頭の中で、あれこれ想念を巡らせてさえいればそれで済むということを意味しない。選手たちは、自分自身で考えたこと、あるいはまたコーチから指示された戦術プランをピッチ上で実現すべく、即座に具体的なプレイに変換し、取りも直さず有効な「身体技能」として体現してみせなければならない使命を負っている。その意味で、彼らは、単なる観察者や傍観者にとどまっているわけにはいかない実践的な当事主体に他ならないのである。

ここで、なお留意しておくべきことは、それがいかなる種類のものであれ、異なるふたつの身体技能を、まったく同じレベルで同時に執り行なうのは、仮にアクロバット芸ならいざ知らず、通常は、ほとんど不可能に近いという事実であろう。それゆえ、両者を十全にこなすためには、一方が他方の下支えになるという、少なくとも上下二層にまたがる階層性の構図で捉えてみることが必要になってくる。こうして、たとえば、トラップからボールキープする技術や、球を転がして運ぶドリブルといった個人技にせよ、スルーパスやヘディングによるコンビネーションプレイであれ、いずれも、その都度、上位に位置すると目される諸技能は、とりあえず「走る」という下位技能を基本として組み立てられ、時と場合とに応じて、さらに何層もの水準（レベル）が継起する、開放系の成層構造を想定してみることが適当であろう。その際、後者は、いずれの局面においても、ほとんど自動化された「暗黙知」として機能しつつ、それぞれすぐ上のレベルの諸技能を達成せしめるよう、十二分に鍛え上げられていることが不可欠の前提要件とされるわけなのである。

## 3 見えるものから見えないものへ―「無駄走り」の効用と戦略幅の拡大

対戦相手のある競技においては、予め目的に即した作戦が練られ戦略が決められるとしても、それらは、きょくりょく悟られることのないよう隠し通そうとするのが常道で

あろう。ところが、こと人員配置のシステムに限っては、4−5−1とか、4−4−2といった具体的な布陣として、目に見えるかたちでコート上に露顕する。したがって、どのチームにあっても、相手の戦術の目指すところを読み取ろうとする探究と分析は、とりあえず、見えるものに依拠したところから開始される。

ところで、DF や MF などの守備エリアであれ、また、それぞれの選手の役割にしても、いずれも終始、固定的に定まっているというわけではない。したがって、相手の出方次第では、いくらでも見直しが図られ修正が施されるとともに、大胆な変更が加えられる可能性さえ開かれていないわけではなく、むしろ時々刻々その様相を変えていくというのが、実情であると言えるだろう[5)]。そうであれば、具体的に活きた戦況を見極めることができるためには、ひとまず目に見えるシステムを手がかりに、いまだ明らかとはなっていない戦術の意図を探り、大局観に基づいて具体化の方途をヴィヴィッドに想い描ける想像力の発動をこそ必要とする。それはまた、鋭敏な現場感覚を研ぎ澄ませ、グラウンドにただよう僅かな兆しから、一寸先の動きを瞬時に嗅ぎ分ける直観的洞察力とも無関係ではありえない。(―このような咄嗟の判断力は、シミュレーションゲームなどではいささかもなくて、自他との連携を意識した具体的な実戦訓練やさまざまな場数を踏むという体験を通してのみ、はじめて育まれる性格のものである[6)]―)。

ほとんど同じことは、「走る」という基本的行為の機能やその様態にも当てはまろう。走るという行為は、ストレートに跳び込むにせよ、パスやドリブルを駆使し、壁をこじ開けて突き進むにせよ、そもそもその前提として、スペース（選手のいない空いている場所）を首尾よく活かせるか、はたまた、別の空間（スペース）を作り出せる可能性があることを要件とする。とりわけ、後者の場合には、走るという運動が、諸種の上位技能の下支えをなすというだけにとどまらず、それまでには見られなかった、まったく新しいヴィジョンを繰りひろげる戦法にもまた関与する事実が、決して見落とされていいわけではない。

---

5）たとえば、ひたすら守りに徹しようとするチームに対しては、いったん引いて相手を自陣深くまで呼び込んだあげく、後ろにスペースが空いたところを見計らい、カウンター攻撃やダイレクトプレイの速攻で一気に攻め上るといった事例が挙げられよう。

6）ただ視覚によってというだけでなく、いわば「身体（からだ）」で覚えるということの重要性は、将棋の指し手の研究においても何ら変わらないものであることが、たとえば次のようなかたちで指摘されている。「私は、パソコンの画面でマウスをクリックして動かすのと、実際の盤上で駒を動かすのとでは、蓄積される記憶の質が違うように感じています。（中略）一言でいうと、パソコンの画面上での研究は、『目で見ている』という感覚になってしまいます。それに比べて盤上で駒を動かしていると、『手で覚える』という感じがします。両者を比較した場合、やはり手で駒を握るという感覚がとても大事なのだと思います。将棋を勉強する際には、駒を並べて動かしていくのが、間違いなく効果的です」（羽生善治ほか『先を読む頭脳』、新潮社、50−51ページ）。

推測されるように、思い切りのいいタイムリーな跳び出しは、他の何ものにもまして、フィールドに動態（ダイナミズム）を導き入れ、システム配置やその構造に大きなムーヴメントを惹き起こす。それにともなう必然的効果として、チーム全体の運動量を増やすとともに、自陣の攻撃にも小気味よいテンポと活気あるリズムを招来することによって、その後の作戦展開に大幅なスピードアップと戦略幅のさらなる拡張をもたらすことにも貢献するのである。

しかしながら、走るという運動行為の一番の眼目は、むしろ「無駄走り」とされるものの効用にこそあるのではないかと思われる。では「無駄走り」とはいったい何か。それはすなわち、当座の局面においてはボールに絡むことがなく、文字通り、一見「無駄」としか思えない走行行為のことに他ならない。ところが、実は、このような「空走り」こそ、あたかも将棋の棋士が何手も先を読むのと同じように、何段階もの先を見越して先手を打つことを意味している。それは、あるいは、相手選手の意表を突き、あらぬ方向におびき寄せてはスペースを作り出すとともに、本来マークすべき対象から逸らしたりする陽動作戦を展開することによって、いやがうえにも揺さぶりをかけ、相手チームを撹乱する。いや、そればかりか、味方の勝機を窺うに際しても、パスのレパートリーやシュートのお膳立てなど連繋プレイの可能性を拡大するに与って、さながら「化学変化」を誘発する触媒のごとき思いもかけない効力を発揮することが期待されるのである[7]。

とはいえ、こうした高等戦術が功を奏するには、察するところ、直面するシチュエーションの只中から、いまだ定かではない局面を見透し、その後の展開を確実にスケッチしうる創造的な構想力の解発がなくては叶うまい。したがって、そこでは、フィールド（場）の内包する潜在的可能性（ポテンシャル）を汲み上げる強力なファンタジーが求められるのであって、文字通り「ファンタジスタ」たる要件を具えていることが顕彰される次第なのである。そして、まさしくこの点にこそ、特定のポジションや役割に囚われることもなく、すばやく臨機応変に対処できる「ユーティリティプレイヤー」（＝「ポリバレント」）が重用され、

7） この点に関しては、ひときわ小柄な選手でありながら、新たに代表チームの一員となったジェフ千葉のMF羽生直剛が、「例えば、シュートが決まっても、後ろに回った人をまず褒めるんですよ。相手DFを釣った人とかをね。まあ、ゴールは褒めますけど、その前に、崩す動きを入れた人を『いい動きだぞ』と指摘をするから、選手もそれをやろうと考える。その重なりがゴールになると思うんです。きっちりと無駄走りを見ていて褒めてくれる。だからうちには長い距離を走って、ボールが出なくても、それに文句を言う選手はいないんです」（『オシムの言葉』、190ページ）との述懐を残している。シチュエーションを的確に読み抜いては迅速な展開を画策し、たとえ無駄足に終わろうと、相手の裏をかいてスペースを作り出す囮（おとり）の運動にも果敢に挑戦しようとする意欲を讃えるオシムの姿勢が、もっとも端的に反映された言葉のひとつと言うべきであろう。

リベロとボランチ（攻撃への切り替えも素早く図れる中盤）の選手に注目が集まる所以があるのだと言っていい[8)]。

## 4 日本サッカーの「固有性」とその活かし方

さて、代表チームの監督が担うべき不可欠の課題として、たとえば、選手の選考（＝招集）とチーム事情の把握、それに、組織力強化に向けた効果的な戦術メソッドの練り上げとシステム配置の工夫等が挙げられよう。特に、後者は、クラブチームを率いる場合に比べると、時間的にも大幅な制約を覚悟しなければならないので、可能なかぎり周到、かつ効率的に準備されなければなるまい。では、オシムが目論むサッカーとは、いったいどういうものなのか。

何よりも先ず、最初に確認しておくべきは、その基本的な姿勢とコンセプトが、「賢く考えること」ならびにクリエイティヴなアイディアや自主性を推奨し、決して「戦術的規律」を金科玉条とするものではないという一点であろう。サッカーは、あくまでも競技スポーツであればこそ、ひたすら勝ち負けにのみ拘るというのではなく、また同時に「愉しみ」を持ち来たらし、「喜び」を生み出すものでもあってほしいからである。この点に関しては、たとえば、次のような言葉が注目されよう。

「私が思考するのは、観客やサポーターは一体何を望んでいるのか、そして何が目的なのかということだ。サッカーとは攻撃と守備から成り立っているもの。その要素の中でいろいろな方法論をとることができるが、私としては、いる選手がやれる最大限のことをして、魅力的なサッカーを展開したいと考えている。（中略）観客が満足するようなことに挑戦することこそが、大切なことだと私は思っている」（『オシムの言葉』、195ページ）。

「作り上げることより崩すことは簡単なんです。家を建てるのは難しいが、崩すのは一瞬。サッカーもそうでしょう。攻撃的ないいサッカーをしようとする。それはいい家を建てようとする意味。ただ、それを壊すのは簡単です。戦術的なファウルをしたり、引いて守ったりして、相手のいいプレーをブチ壊せばいい。作り上げる、つまり攻めることは難しい。でもね、作り上げることのほうがいい人生でしょう。そう思いませんか？」（同上、200－201ページ）。

印象深いのは、ここで志向されているものが、観客やサポーターばかりではない、おそらくは誰もが求める「魅力的なサッカー」であり、しかも、ことさら「攻撃的ないいサッカー」を目指すことこそ「観客が満足するようなこと」への挑戦でもあるとされて

---

8）「普通、守備が得意な選手は攻撃が苦手で、攻撃が得意な選手は守備が苦手なわけだ。そういう意味では両方の質を持った選手が必要になる。それがいい選手の条件だろう？」（『オシムの言葉』、198ページ）。

いる点であろう。そうであれば、一事が万事、監督の一存で管理や差配を強化し、選手をがんじがらめに縛ることが肝要ということには決してならない筈である。むしろ、「無数にあるシステムそれ自体を語ることに、いったいどんな意味があるというのか。大切なことは、まずどういう選手がいるか把握すること。個性を活かすシステムでなければ意味がない。システムが人間の上に君臨することは許されないのだ」(同上、210ページ)。

それでは、「日本チーム」の「個性」とでも呼ぶべきものがあるとすれば、それは、いったいどのようなものとして映っているのだろうか。オシムは、監督就任時の会見と同様、ドイツ語メディアとのインタビューに際しても、「日本の代表チームには、多くのポテンシャルが潜んでいる。ただ、私の見るところ、彼らは、自己固有の強みをしっかりと自覚し、独自のスタイルを見つけていかなくてはならない」とした上で、「その強みとは、機動力、敏捷性、それに優れた個人技ということだが、今後は、さらに加えて、良い戦術が必要となるだろう」(2006年7月5日付「ザルツブルガー・ナッハリヒテン」紙)と語っており、日本サッカーの固有性がいかなるものとして捉えられているのか推し量ってみることができる。そして、そのことが、「日本サッカーの近代化というなら、くり返し言っているように、日本式のチームを作り、独自のスタイルを築き上げることに尽きるでしょう」(「これがオシム流監督術だ」『文芸春秋』2006年9月号、144ページ)との発言にも、そのまま直結しているのではないかと思われる[9)]。

「日本式のチームを作り、独自のスタイルを築き上げる」こと、それは、言い換えれば、日本選手の持ち味を十二分に生かし、その本領を遺憾なく発揮させるということを意味している。とは言っても、そのことは、他から学ぶことを必ずしも排除するものではありえまい。なぜなら、サッカーが、他でもなく先読みゲームの性格をももつもので

---

9) さらには、日欧間の一般的なスタイルの違いにも関連し、ある専門誌のインタビューで、次のような興味深い比較論を展開しているので、参考までに紹介しておきたい。「世界中のどこにおいても、集団的に行動するということには難しさがともないます。ところが、こと日本においてだけは、むしろあまりにも集団的にものごとを見すぎるという弊害があるようです。日本人選手は、往々にして個人的もしくは自律的に振る舞うことが少なすぎます。ですから問題は、個々の選手が、それぞれの力をもってどの程度まで集団に貢献できるかということでしょう。私は、いまサッカーのことを考えていますが、それはまた、人生一般についてもそっくりそのまま当てはまることです。もし、ヨーロッパのチームが集団的なサッカーをするとなれば、それはとても素晴らしいことだと見なされるべきですが、逆に、日本では、誰ひとり責任を取らないということがどうやらあまりにも多すぎるように思われます。個人的に振る舞い、その結果には責任を負う、日本人はそのことをもっと学ぶべきではないでしょうか。なぜなら、いかなるシチュエーションにおいてであれ、すべてを集団主義で解決することなど到底できる相談ではないのですから」(2005年12月19日付ウイーンの日刊紙「デア・スタンダード」の報道による)。

あるとしたら、すでに試みられ、蓄積されてきた定石をまったく知らずに済ますことが、単に得策でないというばかりか、世界サッカーのトレンドに無知なまま、持って生まれた「特質」にだけ自足していたのでは、その後のステップアップの実現には、到底、至らないだろうからである。それゆえ、もっとも心を砕くべきは、ひとえに猿まねに終始することのない、創造性に溢れたトレーニングに尽きるということになるだろう[10)]。

それにしても、「個性」を発揮させる訓練（トレーニング）とは、「自主性を植え付ける」教育などというのと同じように、いわば論理的な矛盾撞着に他ならず、文字通りの二律背反ということにはならないのだろうか。この、一見したところ、容易には解きほぐし難い難題（アポリア）を克服するには、そもそも「個性を活かすシステム」とはどうあるべきなのか、あらためて考察を深めてみなければならない。

## 5 戦術ならびにシステムの構築と自由裁量の余地―「ゲームの規則（ルール）」と「ゲームの論理」

スポーツに限らず、およそゲームといわれるほどのものはほぼおしなべてそうなのであるが、サッカーにもまた、オフサイドをはじめとし、17条にのぼる「ゲームの規則（ルール）」が定められている。だが、ルールによって、「ゲームの論理」までがことごとく統制されてしまうのかというと、決してそういうものではない。たとえば、盤上の知的スポーツとされる将棋においても、守るべき規則は事細かに決められているとはいえ、これまでに知られている指し手は、たかだか「六、七パーセントぐらい」の「氷山の一角」で、「未知の領域はまさに無限の世界なのだ」（羽生善治『決断力』、角川ONEテーマ新書、65ページ）と見積られており、将棋という「ゲームの論理」の潜勢力（ポテンシャル）は、いまだ、ほとんど無尽蔵に幅広いことを窺わせるものとなっている。

まったく同様のことは、コーチが求める戦い方やシステムの構築と、選手個々人の実践的プレイとの関係についても指摘することができよう。たしかに、原則となる戦術プランは、攻撃パターンの枠組みを決め、一定の規律を要求するものであることには違い

10）なるほど、世界ランキング一位のブラジルチームのサッカーや、フランスを代表するジダンの妙技は、誰にとっても目を瞠らせるものであり、魅力的なモデルには違いないが、さりとて、単なる模倣や真似ごとに終始していたのでは本家本元を超えることなど到底できる相談ではないし、第一、だれしもがジダンになれる筈のものでもない。オシムの言葉は、こうである。「巻はジダンにはなれない。だけど、ジダンにないものを持っている。」「日本の長所は、あくせく、すばやく動き回れる点だ。体が小さい分、ぴったり厳しいマークにつくこともできる。日本人としての特性を、自分たちのやり方で生かさねば、もったいない。体の大小や、肌の色など関係ない。知恵と工夫次第では、弱点を利点に変えることもできる。だからサッカーは、おもしろいのだ」（いずれも「オシム監督語録」）。

ないが、それを絶対的規範と見なすのでは、あまりにも愚の骨頂だとしなければならない。なぜなら、システムの陣形は、その時々の選手の技量や相手チームとの組み合わせによっても融通無碍に変化していくのが常套で、「一つのシステムに凝り固まるようでは、選手の顔ぶれだけでなく、プレーの質も限られてしまいかねない」（「オシム監督語録」）性格のものだからである。

オシムは、こう主張している、「システムは関係ない。そもそもシステムというのは弱いチームが強いチームに勝つために作られる。引いてガチガチに守って、ほとんどハーフウェイラインを越えない。で、たまに偶然１点入って勝ったら、これは素晴らしいシステムだと。そんなサッカーは面白くない。例えば国家のシステム、ルール、制度にしても同じだ。これしちゃダメだ。あれしちゃダメだと人をがんじがらめに縛るだけだろう。システムはもっとできる選手から自由を奪う。システムが選手を作るんじゃなくて、選手がシステムを作っていくべきだと考えている」（『オシムの言葉』、121ページ）と。

この伝でいうなら、戦術やシステムは、いわば考えるべき方途を水路づけしているだけであって、そうしたヒントを手がかりに、個々の戦況に応じたサッカープレイの具体化に向け、即興的で当意即妙なアイディアを駆使するアクションは、あくまでも選手自身に委ねられる。それというのも、いかなる試合においてであれ、類似のケースはともかくとして、何もかもまったく同じ局面なぞひとつとしてありえないのが実情であってみれば、日々、「ゲームの論理」の可塑性と多様性を体感できるのは、ひとり選手たちを措いては他にいないのだからである。オシムが長らく指揮を執ったオーストリアのクラブチーム、シュトゥルム・グラーツの教え子イビカ・バスティッチも、たとえば、次のような場面の回想を残している。「紅白戦や対人プレーの練習などで、自分の指示だけを忠実にこなそうとする選手に対しオシムは怒った。オシムは、『サッカーでは数え切れないほど多くのシチュエーションが存在する。その都度なにをすればいいのか、自分で判断しろ。キープ、ドリブル、パスなど選択肢は多いのに、無条件で俺の言ったことをそのままするのをやめろ』と不満気味だった」（「スポーツ・ヤア！」No.145、角川書店、36－7ページ）。

このように、機転を利かせた創意工夫や、俊敏な洞察力こそが問われるということになると、「軍隊ではないから、命令は出さないのだ」（記者会見での発言）といった、なかば戯れ言めいた物言いがなされるとしても、決して故ないこととはしないであろう。しかし、その真意は、それこそ何が起こるか皆目分からないのが実戦の現場というものであり、たとえ、「選手の良い部分を最大限延ばし、欠点を補うために戦術とは必要なもの」（「オシム監督語録」）ではあるにしても、それが十全に機能するか否かは、ひとえに具体的な「場」に身を置き、様々な環境情報に直に接する個々の選手の主体的な判断に俟つべきものであることを示唆している。言い換えるなら、正にここぞというときの決断は、

他でもなく、フィールドに展開する諸様相（コンステレーション）の探知にこそかかっており、予め定められた計算式に従うべきものでも、また、所定のシステム図式に還元されるというものでもありえない。したがって、決まったプランやプログラムを無理矢理に押し付けることは、単に無意味であるというだけでなく、かえって足枷にもなりかねないのである。そして、おそらくはこのことと軌を一にして、自主性をこそ培うべきトレーニングも、最終的な解答や結論を事細かに教えるようなものであってはならず、詰まるところ、選手個々人のモティヴェーションを豊かに育む趣きのものでなければならないということになるだろう。

では、士気を高める指導法とは、いったいどういうものであるべきなのか。とりあえず、オシムの処方箋は、こうである。「モチベーションを上げるのに大事だと思っているのは、選手が自分たちで物事を考えようとするのを助けてやることだ。自分たちが何をやるか、どう戦うのかを考えやすくしてやる。（中略）まずは自分たちのために、自分のやれることをやり切るということが大事だという話をする。次に、対戦相手が自分たちと試合をするに当たって何を考えて臨んできているかということを思考させる、そういう話をする」（『オシムの言葉』、182－3ページ）。それにしても、監督やコーチが手ずから関与できる範囲は、実は、せいぜいのところ、ここまでどまりというべきであろう。なるほど、戦略思考や戦術パターンの多様性に気付かせる練習は、ありとある凡ての状況を想定し、徹底を極めることが望ましい。とはいえ、咄嗟の判断や決断は、その都度、試合の流れをよく読み切った上での新たな方法論の創出に他ならず、そうであればこそ、「遊び」や「冗長性」といった自由裁量の余地をどうしても必要とするものだからである[11]。そして、この間の経緯は、おそらく既存の図式を超えたまったく新しい「包括的意味」の顕在化、つまりは「創発」の機制（メカニズム）を検討してみることで、よりいっそう明らかになるものと思われる。

## 6「サッカーは日々進化し続ける」―「境界制御」の原理と「創発」のメカニズム

現場での具体的な判断は、局面の極微細な変化にも即応できる柔軟にして、かつ機敏なものでなければならない次第については先述した。しかしながら、そのときに期待されるものは、なかば本能的な反応や、もっぱら機械的な反射などではありえない。なぜなら、前者は、おそらく（―長嶋茂雄のような、動物的勘が冴え渡る―）数少ない天才にしか許されない業（わざ）であり、後者は、機械ロボットならぬ人間には、到底よくなしえ

11）「監督としてもっとも嬉しいのは、選手が自発的に意見を言って動き出した時だ」（『オシムの言葉』、216ページ）。「コーチ研修は受講者自身に、『自分は何が欠けているか』を自覚させる手助けをする場所に過ぎない。学生に処方箋を与える場所ではない」（同上、49ページ）。

ないことだからである。むしろ、求められるのは、「目的と意図をもった走り」であり、目標をしっかりと見据えた「志向的行為」に他ならない。では、その違いとは、いったい何なのか。因みに、宮本省三の『リハビリテーション・ルネサンス』（春秋社）によれば、「行為」と称されるものの特性が、「反射」や「反応」と比較しながら、たとえば次のように説明されている。「一般的な日常生活動作、移動、道具の使用、書字、自動車の運転、スポーツ、芸術活動など、あらゆる人間の随意運動はすべて行為である。そこには目的と方法の多様性がある。意図には目的と方法が内蔵されている。反射には明確な目的も方法もない。反応には目的はあるが方法の自由度がない。随意運動には目的と方法が無限にある」（324ページ）。ここでの要点は、反応や反射とは異なり、「行為」には、目的と方法の「多様性」があること、つまりは、なにがしかの自由度が付きものであるという事実であろう。そして、そうした属性は、もとより「創発的行為」においてもまた決して無関係なものではありえない。

ところで、マイケル・ポランニーの定義による「創発」とは、何ごとであれ、「下位レベル」の原理によっては制御することの適わない「上位のレベル」を見出したり生み出したりすることであり、つまるところ、まったく「新しい包括的存在を創造する行為」（『暗黙知の次元』、紀伊国屋書店、72－74ページ）を意味している。そうであれば、それは、まず、発明や発見といった事象にこそ相応しいものであろうが、さらにまた、技能の上達や新たな作動原理の創出にもそっくりそのまま該当するものと考えることができる。そして、それらは、「二重制御」もしくは「境界制御」と呼ばれる原理によってこそ統制されるというのである[12)]。

試みに、熟達の諸条件を考えてみれば明らかであるように、上位レベルの技能は、ただそれまでに培った既成の作動原理を適用することによってのみ達成される体（てい）のものではない。新たな技能の創出には、あくまでも「プラスアルファ」が不可欠で、それは、下位レベルの操作原理によっては結局のところ未決定に残されざるをえない部分、すなわち「境界条件」をいかに自在にコントロールできるかにかかっている（―「境界条件」とは、その名に相応しく、一方では、大きな制約であるとともに、また他方では、創発のための潜在的可能性の宝庫でもあるという典型的な両義性を帯びている―）。その際、目標となる上位レベルは、むろん焦点的感知の対象になるとしても、下位の技能は、も

12）「創発」の諸条件ならびに「二重制御」の機制に関する詳細については、①拙稿「『暗黙知』のはたらきと『創発』への試行（トライアル）―『環境場』の制約にどう対処するのか、をめぐって―」（『言語表象と脳機能から見た環境哲学の拠点形成』、平成17年度名古屋大学・学長裁量軽費プロジェクト成果報告書）、および②柴田庄一・遠山仁美「『暗黙知』の構造と『創発』のメカニズム―『潜入』と『包括的統合』の論理―」（『言語文化論集』、第XXVI巻、第２号）を参照していただきたい。

はや自家薬籠中の暗黙知として機能しつつ、下支えの役割を果たすようなものになっていなければならない。かくして、選手たちは、「境界条件」への潜入を図りつつ、目標達成を可能ならしめる運動調整の可能性を模索する。とはいえ、空白部分を埋めるべき戦略的手策（てだて）は、必ずしも一様ではありえまい。したがって、ありうべき大局観を見据えた想像力と、協応関係をもたらすに足る一瞬の「閃き」を導くセンサーとが協働するとき、有効なコラボレーションの可能性は、ほとんど無限に掘り起こされていくものと考えられよう。したがって、「サッカーとは日々進化していくもの」（『オシムの言葉』、199ページ）との発言も、まさにこの点にこそ起因しているのだと見なすことができる。

## 7「リスクを冒す」ということの意味と責任

オシムの「人生そのものがリスクを冒すスタイルだった」（『オシムの言葉』、195ページ）とされることの一端については、すでに触れたが、実は、魅力のあるサッカーを目指すことが、同時に、リスクと隣り合わせであることにも相応の注意を払っておかなければならない。オシムはこう言明している。「いろんなことにおいてリスクを自ら冒せるかが重要。いまの日本の選手は、何をやるべきかを周りから決められている。ある程度やったら、『次、何をするんですか』と聞いてくる。そうじゃなくて、自分で打ち破って進んでいくべきじゃないか。そのためには、それなりの自由が必要です。ただ、いま選手は前進できるだけの自由が与えられていないことが多い。選手たちは、監督が考えていることを聞くばかりではなく、自分たちの頭で考え、自分たちの決断でリスクを冒す必要があると思う」（「オシムを学ぶ」、『週刊サッカーマガジン』2006年8月1日号、10ページ）。

「自分たちの決断で」リスクを冒すべきは、むしろ選手たちの方であるという見解は、そのまま「二重制御」の作動原理にも合致する。この場合、ふたつの論点が重要であろう。まず第一に、現場感覚をも含めた包括的な意味の理解は、その場に潜入を果たした者にしかできない芸当であり、いかに明敏な省察に優れたコーチであっても、選手に取って代わることは、たとえ切に願ったとしても、金輪際、叶わぬ相談であること、今ひとつは、「境界条件」の制御（コントロール）は、あくまでも「創発」への挑戦であり、したがって、成功が予め保証されているのでは決してない危機や混沌（カオス）に際会しているのとまったく同断なのだという事態の認識である。ならば、直観的認知と実践とを統合しうる可能性は、ひとえに選手にのみ与えられた特権であるが、戦術目標をよく弁え、連繋プレイの可能性を信じて、のるかそるかの賭けに打って出るのも、またピッチに立たされた選手たち以外ではありえない。それゆえに、彼らは、自らのアイディアの創造性に賭け、まったく新しい地平を切り開く試行（トライアル）をこそ求められるのであって、前線での決断には、勇猛果敢に挑もうとする強い気概と大いなる勇気とが不可欠である由縁となろう。それはもとより、大きなリスクを背負うことを意味しており、当然のことながら、「責任」ともまた無関

係ではありえない。だからこそ、オシムは、「走ることと責任感がなければ、ゲームは成り立たない」(「オシム監督語録」) とする一方で、こう断言しているのである、「グラウンドへ出るのに勇気を持たない選手はいないだろう。たとえいたとしても、私はそういう選手は使わないし、勇気を必要としないスポーツに転向すればいい」(「オシム監督語録」) のだと[13)]。

## 8「トータルフットボール」を目指して―「美しいサッカー」とはどういうものか

以上、見てきたように、どのチームにおいても戦略思考の拡大には余念がなく、サッカーが、日々進化し続けるものであるとするなら、「理想的なサッカー」なぞ、「絵に画いた餅」でしかなく、その実現は、いつまで経っても望むべくもない夢物語という理屈になろう。じじつ、オシムは、「トータルサッカー」はいつ完成するのかとの問いに答えて、「常により良いプレーを目指せるわけだから、いつまでたっても実現できないよ (笑)。近づくことはできると思うけどね」(「オシム監督語録」) と、その心の裡(うち)を披瀝している。だが、たとえ実現することは容易ではないとしても、彼が、目指しているとされる「トータルフットボール」とは、果たしてどういうものなのか、最後に、その一端を窺ってみることで、今後のゆくえを占いたい。

「監督語録」には、「ボールを動かせるサッカーが理想だ」と揚言される一方で、また、「ポジションうんぬんというより、コンビネーションによるトータルサッカーを目指したい」、「特に、トップクラスの選手はシンプルにプレーするものであり、それが一番美しいものだ」といった言葉も散見されており、「同時にサッカーにおいて最も大切なものもアイデアだ。アイデアのない人間もサッカーはできるが、サッカー選手にはなれない」(『オシムの言葉』、43ページ) との表現などとも考え合わせると、オシムの想い描く「トータルサッカー」とは、どうやら「賢明なアイデアを総動員し、全員のチームワークを活

---

13) 興味深いことに、最新の芸談の中にも、勇気と責任に関する、ほぼ類似の表現を見出すことができる。丸本(まるほん)歌舞伎の再検討を通して、近松作品を中心とする上方和事(わごと)芸の復興に邁進し続ける三代目中村鴈次郎改め平成の坂田藤十郎は、たとえば、次のように語っているのである。「私が考えている理想とは、伝統の中で受け継がれてきた歌舞伎を、もう一度洗いなおして、自分の歌舞伎に創りなおすことです。(中略) それだけのことをやるからには責任がありますし、とても大変です。しかし、お客様に『この味付けもおいしかったよ』といっていただけることは何よりの喜び。歌舞伎という伝統の世界では、演出を見直すのはとても困難なことですし、勇気がいることだとされていますが、それが藤十郎のなすべき挑戦だと思っています」(『坂田藤十郎　歌舞伎の真髄を生きる』、世界文化社、114－5ページ)。新たな境域に挑戦しようとする者たちの、いわば共通認識が語られているのだと言うべきかも知れない。前例に倣い、ただ上司からの指示に唯々諾々と従うばかりの官僚制に、たとえ責任逃れはあるとしても、決して責任感が生じない次第については、事あらためて強調するに及ぶまい。

かして、コンパクトに戦うシンプルなサッカー」とでもいうことになるらしい。それがまた、見事なアンサンブルを現出するとき、「やはりサッカーというのは、すごく美しいスポーツだと思っている。（中略）それにどこまで近づけるかが大事でしょう」（同上、199ページ）という物言いの本源的根拠になるのだろうと思われる。

ところが、「考えながら走る」というのが、オシム流フットボールのモットーであるとするなら、そのことと、「美しいサッカー」とはどういう関係にあると言えるのだろうか。面白いことに、エゴイスト呼ばわりされることも一再ではなかった中田英寿にしてからが、「きれいなサッカー」をキーワードに、たとえば、次のようにその理想を語っているのである、すなわち「僕は基本的にはきれいなサッカーをやりたいんですよね。ドリブルで３人、４人を抜いてシュート、そしてゴールというようなプレーよりも、たとえばダイレクトパスが５本、６本つながって、みんなでゴールを奪う。そういうサッカーが一番いいと僕は思うんです。その方がきれいだと思うし、プレーする方も楽しいはずだから。ただ、それをピッチで実現するには一個人だけじゃどうにもならない。みんなが同じコンセプトを共有することが重要だし、周りとのコンビネーションも必要です」（『Number　PLUS』、2006年９月号、103ページ）と。

ここに示唆されているものこそ、実は、オシムのいう「トータルフットボール」の、ひとつの具体的なかたちであるとは言えまいか。そこでは、何もかもを特定のエース・ストライカーに恃むのではなく、だれしもが「同じコンセプトを共有し」、コンパクトで無駄のない、その意味では、この上もなくシンプルな、ワンタッチパスを繋いで攻め上がる攻撃型のサッカーが望み見られているのである。それゆえに、「もっと頭を使え」と言われても、もとよりそれは、ヘディングの回数を増やせといった冗談などではない。「アイデアが大事だ」とは、その場の空気を的確に察知し、流れをするどく読み抜いて、呼吸（いき）を合わせた有機的な連繋プレイを心掛けよとの謂いである。したがって、選手たちに期待されているものは、不測の事態に遭遇しても、一切、動じることなく対処できる適応能力を磨くとともに、思い切りのいい決断をもためらわず、賢明で巧みなコンビネーションを組み立てるということに他ならず、また同時に、互いの個性を活かし合いながら、なおかつチーム一丸となって押し寄せる怒濤のごときコラボネーションプレイでもなければならない。その結果、立ち現れる生動的ムーヴメントは、人と人とを介して醸成されるチームワークの美しさであり、それこそが「日本式サッカー」ならではの、骨身を惜しまぬダイナミズムとでも称すべき、圧倒的な運動量の軌跡に他ならないのである[14)]。

14）そのような運動行為は、もとよりライヴで目の当たりにするに如くはないものであるが、幸いジェフ千葉のDVD映像（『2005シーズンレビュー』）によってもその片鱗に触れることができる。なかでも、対磐田戦および新潟戦での、ひたすら嵩にかかって畳み掛けていくフォーメーションプレイは出色である。

ところで、「美」を成り立たせる中心的な要素のひとつに、「合目的性」を挙げないで済ませることは難しい。だが、何らかの意味で目的に叶うということを、ただ論理的に計算可能な数学的アルゴリズムに当てはまる「予定調和」の範囲内に限定するなら、それもまた、あまりに一面的との謗(そし)りを免れまい。じっさい、美の本質を追求したイマヌエル・カントも、「規則の課する一切の強制から離脱」したとき、趣味は、その最高の完全さを発揮し得るのだとし、いかなる拘束からも遁れ「もっぱら表象力の自由な遊び」（カント『判断力批判』上巻、篠田英雄訳、岩波文庫、141ページ）として具体化されたとき、もっとも純粋な美として顕現するのだと述べており、「規則正しさによって秩序との調和を求めようとしたら、対象は悟性を楽しませるどころかむしろ構想力に堪えがたい強制を加えること」（同上、142ページ）にならざるをえないという点には格別の注意を促している。ほとんど同じ趣旨のことは、いみじくも「運動の擁護」と副題された蓮実重彦『スポーツ批評宣言』（青土社）の中でも、次のように立言されている。

「スポーツには、嘘としか思えない驚きの瞬間が訪れる。また、人はその驚きを求めて、スポーツを見る。文化として始まったものが野蛮さにあられもなく席巻される瞬間を楽しむのです。優れた選手とは、文化として始まったものを、いきなり自然によって蹂躙してしまう野蛮な存在にほかなりません。」「不意に文化を蹂躙する野蛮なパフォーマンスを演じること。それを、運動することの『知性』と呼ぶことにしましょう。これは、『知識人的』であることとはいっさい無縁のものですが、それを周囲に組織する能力を、運動することの『想像力』と呼ぶことにしましょう。『知性』と『想像力』とが一つになったとき―ごく稀なできごとなのですが―そこには動くことの『美しさ』が顕現します。だから『美しい』選手がいるのではない。選手が『美しさ』を体現してしまう瞬間があるというだけなのです」（13ページ）。

予め想定された予定調和を打ち破る「野蛮な」までの「パフォーマンス」、そうしたサプライズを招き寄せる「運動」が、どんなに意表を突いたものであるにもせよ、めぐり巡ってさらに高次元での合目的性を創出しうるものであるとするなら、それもまた、そのことに同調しえた観客たちに、スリリングでエキサイティングな、新しい美のモデルとして受け容れられてゆく可能性をもっている（―事は、何も「前衛芸術」にのみ限った話ではない。そもそも「創発」とは、ことごとくがそうしたものであり、「突然変異」もまた、「進化」の内の出来事であることにはあらためて贅言を要しまい―）。このように、日常性の彼方にあって、思いもかけない突発的な出来事（Ereignis）が生起するところにこそ、スポーツ特有の魅力のひとつが見出されるのだとするならば、実は、W 杯で大きな物議を醸したジダンの頭突きも、通常は表立たない矛盾や葛藤が、一気に噴き出して、たちまちその姿を現わした典型例のひとつということになるのかも知れない。スポーツの臨界においては、往々にして、それまでの経験(キャリア)のすべてが凝縮して露出する

ことがあるもので、必ずしも往年の伝説的名プレイヤー、すなわち、華麗な足技のペレと強靭な身体能力から繰り出されるシュートとドリブルが印象的なマラドーナだけでなく、ロナウジーニョの妙技やジダンの「マルセイユ・ルーレット」にひとが魅了されるのも、そこには、いまだ「ピッチ」などと呼ばれるフィールドのなかった時代の環境によってこそ育まれた「遊戯性」が見て取れるからであり、それがまた、観る人の限りない愉悦感を喚起して止まないのだろうと考えられる。彼らは、魅力的なフットボールに必要とされることのすべてを、おそらくは、貧しい場末の路地や野原の空き地で打ち興じた「草サッカー」を通して、いわば「自由な遊び」の中で培ったのである[15)]。

かくの通り、スポーツの御多聞に洩れず、サッカーにおいてもまた、筋書きのないドラマが展開されていくのが常態であるとすれば、そこには、意外性や遊戯性に充ち満ちた「運動行為」を見届けるという愉しみ（と感動）が約束されたということはならないだろうか、もっとも、その際には、これを見る側にも、「しっかり考えてみよ」というメッセージに感応しうるだけの「知性」と「想像力」とが求められるのではあるにしても[16)]。

---

15）国籍や国境といった「近代的なもの」の枠組みをはみ出していかざるをえないサッカーの本源的特性とその動向、ならびに勝敗に拘るあまり、ナショナリズムや「商業主義」からも自由になれないサッカー・ジャーナリズムが助長して止まない問題性についての論議は、今福龍太『フットボールの新世紀』（廣済堂出版）に詳しい。また、序でに付け加えるとするなら、オシム自身、最新刊の単行書『日本人よ！』（新潮社）のなかで、自らの「ストリートサッカー」体験に言及するとともに、スポンサーからの重圧による「商業主義化」と「勝利至上主義」の弊害についてもあらためて警鐘を鳴らしている。

16）先にも引いた『スポーツ批評宣言　あるいは運動の擁護』では、さらに次のようにも指摘されている。ものみなすべて安易な「ファシズム的心性」に靡くことに無自覚な今日の世相にあって、特に銘記すべき訓戒であると言わなくてはならない。「日本では、スポーツに関する新聞やテレビの報道は、『運動』を抑圧するものとして機能しています。これは、ジャーナリズムとして問題を含んでいるというにとどまらず、人間の生命に対する侮蔑としか思えません。彼らは決まって『運動』を抑圧しようとする。つまり、『反＝動的』なのです」（38ページ）。